

talk! talk! talk! フォークシンガー・なぎら健壺さん



フォークシンガー なぎら健壺さん

ドラマでの"味のあるおじさん"やバラエティーでの"物知りおじさん""おかしなおじさん"。そんな印象を持つ人も多いのではないだろうか。しかしひとたびステージに立てば、心にしみるフォークソングを歌い奏でる"かっこいいおじさん"になる。フォークシンガー・なぎら健壺さんは、多才、そして多趣味としても知られている人である。

そんななぎらさんがここ最近のめり込んでいるのがカメラ。

今回は、"少年のような目をしたおじさん"になったなぎらさんにとっぴりとお話を伺った。

プロフィール

なぎら・けんいち。1952年、東京銀座（旧木挽町）生まれ。現在も下町に住む。

1970年、中津川フォークジャンボリーのステージで、飛び入り参加して歌った歌がレコードになり、これをきっかけにフォークシンガーとしてデビューする。72年、ファーストアルバム「万年床」を発売。以降、心にしみる、懐かしい趣きのフォークソングを歌い続けている。吉祥寺マンダラ2でのマンスリーライブは20年以上続いており、観客は男女を問わず、20代～50代と実に幅広い層を魅了している。

現在は、その独特のキャラクターで、ドラマ、コメンテーター、ナレーター、リポーターなどテレビでも活躍中。また、ラジオや執筆活動も行い、下町暮らしの知識を活かして「東京の江戸を遊ぶ」（ちくま文庫）「ぼくらは下町探検隊」（ちくま文庫）などの書籍を上梓している。

趣味人としても知られており、カメラの他にも自転車、散歩、絵画、落語Aパソコン、プロレス鑑賞、からくた収集など様々。

フォークの先輩に感化され 購入したニコマート

カメラとの出会いを聞かせてください。

73年ですね。フォークの先輩に高田さんっていう方がいてね、いつもカメラを持ち歩いていたんですよ。彼が結構良い写真を撮ってるんですよ。で、悔しくなったんですよ。あの人が撮れるならあたしも撮れるなと（笑）。それでニコマートを買った、それが最初です。

悔しくなったというのは？

あたし、デザイン学校出てるんですよ。絵をやっていたから、割合に構図とかはお得意なんです。だから高田さんの写真を見たときに、素人がこれだけのものを撮りやがってという悔しさがあったんですよ。ということは、あたしにも撮れるな、と（笑）。

最初にニコンのカメラを選んだのは理由があるのですか？

なんでしょうね？ とくにブランド意識があったわけではないんですけどね、ニコンを買えば間違いないというのは頭にありましたね。高田さんが使っていたのがニコンだったというのはあったと思うんですけど、なんかニコンがいいなと思っちゃったんだよね。

でもあの、レンズの固さがあたしは好きなんです。ニコンは固めに撮れるでしょ？

どんなものを撮っていたんですか？

当時はフォーク全盛でしたから、全国を回って歌っていたんです。旅がすごく多かったんですよ。それで、旅のシーンをカメラで切り取りたいな、みたいな思いもあってね。でもね、いかにせよニコマートは重いでしょ（笑）？ だから途中でちょっとギブアップしちゃった。

結果的に日常をよく撮っていましたよ。下町に住んでいましたから、下町を撮ることが一番多かったかな。今も下町の写真を一番よく撮っていますよ。



デジタルカメラが 撮る楽しみを教えてくれた



今回は、「うつる」をテーマに写真をセレクトしたそうだ。一枚目は取材で訪れたという鳴子の共同浴場にて。

気軽に撮れるというのがデジタルカメラのいいところですよ。

そうでしょ？ 昔は写真機といえど金持ちが持つようなものであって、一枚一枚フィルム巻いてって、どこか大仰なイメージがありましたよね。でもデジタルであれば手軽に誰でも手にしやすいし、数多く撮れるし、銀塩に優るとはいえなくても劣ることのない写真が出来るわけじゃないですか。あたしがのめり込んだっていうのはそこなんです。

デジタルカメラで撮る、写すってことが楽しくなったからこそ、今では昔の銀塩カメラなんかにも興味を持つようになったんですよ。

あとは、こういった、おかしな奴を撮ってみたり。

デジタルカメラが、カメラ全体への興味を広げてくれたんですね。

今日お持ちいただいたFM2は、いつ頃買われたものなんですか？

これはもう10年前ぐらいかな。ニコマートの次に買ったんですよ。あのね、その後もカメラは何台か買いましたが、本当に凝りだしたのってここ最近なんですよ。

凝りだしたのには理由があるんですか？

こいつ（D100を持って）でしょうね。これは買ってからちょうど一年ぐらいですけど、このデジタルカメラを使うようになってから凝りだしましたね。

ほら、現像代がかからないでしょ。今まで、現像代気にして、きっと面白くなさそうだから押さえなくていいやって思って撮らなかつた場所でも、これだと気にしなくていいじゃない。なんでも気にせずパカパカ撮れるから、逆にカメラに対する興味が湧いてきたというか、身近になったんですよ。

そうそう。ほんと、デジタルカメラのやったことってすごく大きいと思いますよ。ここまで一般家庭に広く普及したっていうのはね、デジタルカメラが写す楽しさを教えてくれたからだと思うんです。技術も知識もノウハウもいらない、とにかく撮って楽しんでみてよっていう部分で広がっていると思うんですよね。

だから、その先へもうひとつ延ばせるようなデジタルカメラを考えてくれたらと思うんですけどね。

"撮って楽しむだけ"から、さらに興味を深く持てるようなものを、ということですか？

ただお手軽な、安易なカメラというところで止まってほしくないというか、それは寂しい気がします。もっと遊び心みたいなものが増えていくと、また違ったファンがデジタルカメラを持つようになるんじゃないですか？Sマウントのデジタルカメラなんかいいですよ。"SPのデジタルカメラ"とか、そういうのをニコンでもやってくると面白いと思いますよ。



D100に装着されているレンズは45mmf2.8Pのシルバー。
「あえてこれつけてみたんだけど、この組み合わせで持つ人はあまりいないでしょ？(笑)」

ずっと惹かれ続けているのは 生まれ育った下町の風景

現在はD100で撮影することが多いのですか？

そうですね。下町に限らず移動するときはいつもD100を持ち歩いていますよ。とにかくデジタルカメラですから、気にせず気が向いたら何でも撮っています。

銀塩のとき、フィルム1本出して1枚しか良いのがないとガッカリするじゃないですか。それが無いのいいんで。

銀塩で1枚1枚丁寧に撮るといことはしないんですか？

やりますよ。銀塩もいつもだいたい持ってますし、それは大事に撮ってます。でもね、それはまったく別個のもので。デジタルカメラと銀塩は別。それぞれの楽しさはあるんですけど、あたしは下町歩きが好きですから、銀塩だと10m歩いて1枚しか押さえられないけど、デジタルカメラだと10枚撮れるっていう感覚がいいんですよ。

下町の魅力とはなんですか？

下町ってね、ものすごく早く変わっていくんです。ほかの土地は、もう東京らしさを失っていますから、さほど風景は変わらないんですよ。でも下町にはまだ下町らしい風景が残っていますからね。だから余計に風景が失われていくスピードが早いんです。だから下町にずっと惹かれ続けているんじゃないかと思うんですけどね。

変わっていくというのは、開発によって下町の風景が無くなっていくということですか？

そうそう。しかもね、変わるっていてもマイナーチェンジなんです。これは下町に限ったことではないんだけど、六本木ヒルズみたいに町全部が新しくなれば人は気づくんです。でも、いつの間にかあそこにあった八百屋が無くなって何かになっているっていうと、人って割合に気づかないんですよ。ふとしたときに、そういえば無いぞーって。だから常に気持ちをその町において置かないと、いつの間にかマイナーチェンジを繰り返して、気づいたときには恐ろしいほど変わってしまっているものなんです。

変わってしまう前に、写真に残しておきたいという思いがあるんですね。

別に、撮らなくちゃいけないとか、そういう使命的なものを背負って撮ってるわけではないですよ。そう思って撮っても面白くないですから。

自分の中の景色とかね、下町に生まれて育ってきましたから、大事にしたいところがあるんでしょうね。でも基本は撮ることが楽しいってことですから。撮ってるものは下町の風景や人物でも、撮る楽しみの方が大きいですからね。使命的になってはいけません。



車の窓に映るネオンにどこか哀愁が漂う。



銀座四丁目交差点。
放射状にのびた雲に惹かれてシャッターを押したのかとおもいきや、雲に気づいたのは撮影後だったそう。

カメラをいじる楽しみと写真を愛でる楽しみ ふたつの楽しみがカメラの魅力

なごらさんといえば、趣味人として有名ですが。

まあ、広く浅くですけどね。

テレビなど拝見していると、とてつもなく広く深いように感じますが。

あのね、もの凄い勢いでめり込むんですよ。前に自転車やゴルフをやっていたときも、一年間ぐらいでプロと張り合えるだけになりましたよ。脳みそだけで。まず知識を短期間にパッと入れちゃうんです。でもね、そうなるって飽きちゃうんですよ。それでまた次っていう感じですね。

では、現在はカメラの知識を入れているところでしょうか？

そうですね。まだまだですけどね。ツアイス・イコン社の時代まで戻ってますから。ニコンと戦艦大和、とかね(笑)。

そこまで戻りましたか(笑)。では、カメラへの興味はもうしばらくは続きそうですか？

これは割合長く続きますよ。あんまりのめり込み過ぎないようにしてますけど、のめり込んだものは仕方がないです。でもカメラは奥が深いですから、まだまだ大丈夫だと思います。

知識だけでなく、撮る楽しさも手伝って長続きしているのでしょうか？

そうですね。カメラとは何ぞやという知識を覚えること、露出とは何ぞやという技術的な知識を覚えること、さらにそんなの関係なくただ楽しくて写すんだという部分があるから面白いんですよ。

しかもね、カメラって機械的なものをいじる楽しさと、写ったものを愛でる楽しさがあるんです。だいたいのは楽しみはひとつしかないんですけどね。ふたつの楽しみがある限り、カメラはすぐには飽きないんじゃないかな。



水面に映る影と光。
全体のトーンが美しい。

趣味のカメラも仕事となると.....「趣味を仕事にするのが一番辛いです」

カメラ以外で今、はまっていることはありますか？



空の青とミラーに映る夕焼けのオレンジの対比が鮮やかな一枚。

ただ純粋に楽しめるものがなくなってしまったという。

そうなんです。クラス会なんかで、お前はいいなあ、趣味が仕事でってよく言われますけどね、やってみる！って言いたくなりますよ。趣味を仕事にする辛さっていうのは一番よくわかってますよ。

でも、なぎらさんの場合は、そこでまた違った趣味を見つけて来られたのではないですか？

ところがね、我々の仕事って、どんな趣味も仕事になるんですよ。これは仕方がないことなんだけど、マラソンが好きだって言ったらそれが仕事になっちゃうんですね。追っかけて取材させてくださいとかね。自転車もそう、自転車の番組やったりしていましたから、家で乗りたくななくなっちゃったんですよ。

さっき言った、すぐに飽きてしまうというのはそこかもしれない。そういう部分で、途中で見切りをつけてしまうのかもしれないですね。

本日、趣味のカメラについて取材させていただいたわけですが.....ぜひこれからも、カメラへの興味をなくさずに楽しんでいただきたいと思います。

(笑)今の所は大丈夫です。でもほんと、あんまりのめり込み過ぎずね、"これは仕事にはなんねえだろう"って思われる程度に収めていかないとね。気をつけていきますよ(笑)。

もともとね、ぶらぶら町を歩くのが好きなんです。そういうときにデジカメラが登場したもんだから、カメラ趣味と散歩趣味が合体しちゃったんです。散歩の楽しみ+αでカメラの楽しみができるから、今はそれが一番楽しいですよ。逆にね、連載などで写真を撮りにいかなければいけませんってなったときに一番楽しくないんですよ。義務であり、仕事になっちゃうとつまらないですね。また、そういうときに限って良い写真が撮れないものなんです。

趣味を仕事にするというのは、辛いものなんですか？

実はね、あたしはそれが一番辛いんです。

もともと、フォークソングが趣味でこの世界に入ったんですよ。家に帰って何が楽しみかっていうと、歌本を広げてギターをジャカジャカやるのが楽しかったんですよ。それが、一日その仕事をして家に帰るようになると、一日弾いたギターなんか、もう出したくないですよ。そうすると仕事を忘れてリラックスするってことができなくなるんですね。逃げ場がなくなるんですよ。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.